

弓道の学習指導と評価について

保健体育 体育 普通科・第3学年
石川県立大聖寺高等学校・教諭

1 事例の概要

本校は、第1学年普通科普通コース5クラス、普通科国際文化コース1クラス、第2・第3学年普通科普通コース5クラス、普通科人文国際コース1クラスの計18クラス、全校生徒717名（5月1日現在）で、男女比は45：55とやや女子が多い。「自主自律」の精神を堅持し、部活動加入率85%、うち運動部加入率は68%であり、活発で頑張る生徒が多い学校である。

体育の授業は8単位（1年2単位、2年3単位、3年3単位）実施し、保健の授業は1・2年で各1単位の計2単位である。年間の体育的行事についても、球技大会（7月、3月）、体育祭（9月）と比較的少ないことから、体育の授業で積極的に体を動かそうとする生徒が多く、意欲的に取り組みやすい現状にある。

そこで、各学年で選択制を導入し、1年生では3学期、2年生では2学期、3年生においては1学期より選択制授業を行っている。内容は、本校保健体育科教諭の専門性を生かし、フラッグフットボール（2・3年生）と弓道（3年生）を加えて授業を行っている。いずれの授業も生徒に人気があるが、弓道については、道場の広さに限りがあるため、人数を制限しなければならない状況にある。

2 実践内容

(1) 単元の目標

弓道は、静的な動作が多いことから簡単に思われがちであるが、それらはすべて全身運動であり、筋力やバランス感覚を要し、的中するため自ら考える力も要する。そこで、弓道を通して、運動技能や考える力を身につけさせるとともに、弓道に触れる喜び、的中する楽しさを味わうことができるようにする。

また、弓道は、中高年で競技者として活躍している人も比較的多く、年齢を問わずにできるスポーツであることから、学校体育での弓道の経験を通して、生涯にわたって運動に親しむ資質や能力を育てる。

(2) 指導上の工夫点

① ペアでの活動

- ・正しい動作ができているかどうかを確認し合い、自分の練習に活かす。
- ・的中しないのはなぜか、考えさせる。

② ミニゲームの効果的活用

- ・単調な動きばかりのため、意欲的に取り組めるようにする。
- ・競争意識から、技術上達への向上心を引き出す。

③ 自己評価

自己評価を活用し、できたこと・できなかったことを再確認し、次時への課題を探らせる。

3 指導の実際

(1) オリエンテーション（1時間）

① 予想される危険についての説明

② 弦の張り方、外し方を学び、実践する

(2) 射法（技術）の習得（2時間）

- ① 手本を見ながら実践（ペアを組み、お互い確認し合い練習）
徒手による射法八節（弓の引き方）の理解、習得
ゴム弓での習得
素引き（弦を張った弓を引く）での習得
- ② 自己評価

(3) 近距離からの発射（10時間）

- ① 手の内の作り方 ② 矢を選ぶ、矢のつがえ方 ③ 左手の使い方、取りかけの仕方
- ④ ねらいの付け方 ⑤ 的から5m程の位置から発射（毎時間少しずつ距離を伸ばす）
- ⑥ ペアで確認し合い練習 ⑦ ミニゲーム ⑧ 自己評価

(4) 正規の距離（的から28m）からの発射（2時間）

- ① 道場の中からの的に向かって発射 ② 個人戦 ③ 団体戦 ④ 自己評価 ⑤ 授業の感想

C-1 指導案

C-2 自己評価表

C-3 正しい手の内

C-4 正しい取りかけ

4 成果と課題

(1) 成果

選択制授業で「弓道」を取り入れてから、毎年、選択希望する生徒が多く、人気が高い。弓を引くのが初めてという中で開始される授業は、経験したことのないことに触れる喜びと不安が入り交じり、生徒の興味関心が非常に高く、的を見て必死に中てようとすることに楽しさを感じている。また、どの生徒にも、他の誰よりも中てようとする向上心が感じられ、積極的な姿勢で授業に取り組んでいる。はじめは、ゲーム感覚で臨んでいる生徒も、授業が進むにつれて、思ったよりも様々な部位の筋力とバランス感覚が必要なことや、集中して考えることが必要なことを理解していく。簡単に中てられると思っている生徒がほとんどだが、最後の感想では、多くの生徒が「難しかった」と述べている。また、「難しかったけど楽しかった」という感想も多いことから、自分の身体の動きを意識し、実践を重ねながら「弓道」という種目を楽しめたと同時に、その特性を十分に味わえたことがわかる。さらに、集団スポーツでは、思うように輪の中に入れなような生徒も比較的取り組みやすく、上手に引いて中てると、他の生徒から注目を集めることがあり、そのような生徒が自信を持って活動できている。

(2) 課題

ペア学習を取り入れ、どのようにしたら中てられるのかを考えながら練習をさせているものの、ポイントを的確に理解し、技能習得できている生徒が少ないことから、指導方法の改善が必要である。評価については、射法（技術）の確認をするため、すべて射法に関する項目を設定し、毎時間、授業の終了時に自己評価をさせたが、項目数が多く、難易度の高い項目もあったことから、教師側の評価と大きく食い違うケースが見られた。自己評価させる項目数と内容の精選については、改善していく必要がある。また、運動の技能に関する項目だけでなく、関心・意欲・態度や知識・理解等を問う項目が含まれるよう工夫を凝らしていきたい。